

外国語教育メディア学会（LET）
関西支部 2016 年度秋季研究大会
発表要項集



日 時： 2016 年 10 月 8 日（土） 10:00～16:45
場 所： 同志社女子大学（今出川キャンパス）
Doshisha Women's College of Liberal Arts
〒602-0893 京都市上京区今出川通寺町西入
<http://www.dwc.doshisha.ac.jp/>
主 催： 外国語教育メディア学会（LET） 関西支部
<http://www.let-kansai.org/>
事務局： 〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
関西大学外国語学部 山西博之研究室内
Tel. 06-6368-0528
E-mail: kansaiet@gmail.com

プログラム

- 9:30-15:15 受付■純正館1階 エントランスホール
- 10:00-10:10 開会行事■純正館地階014教室
司会◆山西 博之 (関西大学)
挨拶◆若本 夏美 (会場校・同志社女子大学 英語英文学科長 教授)
挨拶◆杉森 直樹 (支部長・立命館大学)
- 10:15-12:15 シンポジウム■純正館地階014教室
「学習者の学びについて考える」
司会◆池田 真生子 (関西大学)
パネリスト◆八島 智子 (関西大学)
Stephen Ryan (Waseda University)
吉田 達弘 (兵庫教育大学)
指定討論者◆新多 了 (名古屋学院大学)
- 10:00-15:05 業者展示■純正館1階エントランスホール
- 12:15-13:15 昼食■
- 運営委員会■純正館地階016教室
- 12:25-13:10 Classroom Tips■純正館1階104教室 ①12:25-12:45 ②12:50-13:10
(Tips デモ10分 + 質疑応答10分)
司会◆植木 美千子 (関西大学)
① 電子書籍を「聞く」- スマートフォンのText-to-Speechの活用 -
清原 文代 (大阪府立大学)
② Quiz Grading and Analysis: Two Minutes and One Cellphone
Myles Grogan (Kansai University)
(Luncheon seminar ですので、参加者は昼食をご持参ください。)
- 13:15-14:55 研究発表・実践報告 ①13:15-13:45 ②13:50-14:20 ③14:25-14:55
- 第1室(研究発表・教材開発) ■純正館1階105教室
司会◆近藤 睦美 (京都外国語大学)
① 学習経験と学習に対する価値づけが振り返りに与える影響:e-Learning 語彙教材使用者を対象にして
松岡 真由子 (京都大学大学院生)
② 初級学習者のための英語ディベート:「シンプル・ディベート」の試み
橋尾 晋平 (同志社大学大学院生)
③ リーディングラブ Ver.2 の開発
平尾 日出男 (追手門学院大学)
- 第2室(研究発表・実践報告) ■純正館1階106教室
司会◆大塚 朝美 (大阪女学院短期大学)
① Text-to-Speech を使った音読練習によるプロソディ向上の効果
笠巻 知子 (立命館大学)
② 日本人学習者の英語イントネーション再考
東 淳一 (神戸学院大学)

- ③ TOEIC リスニング授業におけるパワーポイントを用いた音読トレーニング
大橋 香苗 (京都産業大学) ・西浦 ミナ子 (京都産業大学)

14:55-15:05

休憩

15:05-16:35

基調講演■純正館地階 014 教室

“Incorporating CLIL in English Teaching in Japan” *講演言語は英語

講師紹介◆上田 洋子 (大阪女学院大学)

講師◆和泉 伸一 (上智大学)

16:35-16:45

閉会行事■純正館地階 014 教室

司会◆山西 博之 (関西大学)

挨拶◆小山 敏子 (副支部長・大阪大谷大学)

17:00-19:00

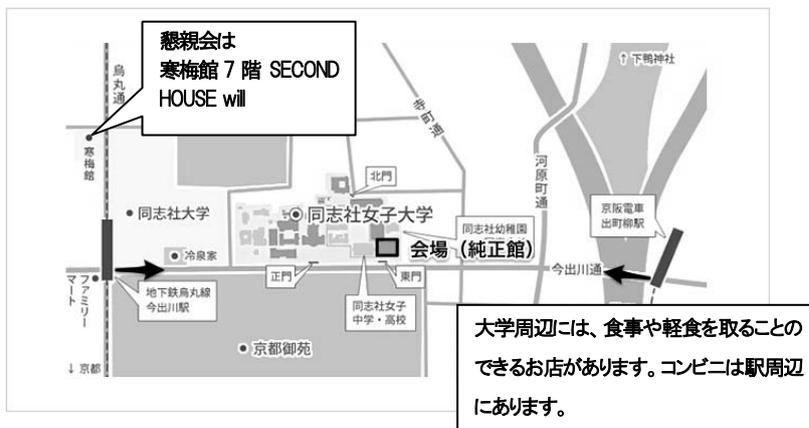
懇親会 フレンチレストラン SECOND HOUSE will (同志社大学寒梅館 7 階)

司会◆名部井 敏代 (関西大学)

挨拶◆伊庭 緑 (副支部長・甲南大学)

お知らせ

- 参加者は、受付で参加登録票にお名前・ご所属を必ずご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円 (大学院生は、学生証を提示していただくと 1,000 円) を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局 (受付) までお申し出ください。
- 当日キャンパス内の学食は開いておりません。大学周辺のレストラン等をご利用下さい。(なお、大学周辺にコンビニエンスストアはございません。駅周辺のストアをご利用ください。) お弁当をお持ちの方は 104 教室もしくは 5 階テラスでお召し上がりください。
- 館内は全面禁煙です。
- 懇親会はフレンチレストラン SECOND HOUSE will (同志社大学寒梅館 7 階) にて開催いたします。参加費は 2,000 円 (学生 1,000 円) です。当日、大会受付にてお申し込みください。
- 会場へは公共交通機関をご利用ください。



Incorporating CLIL in English Teaching in Japan

和泉 伸一（上智大学外国語学部）

本講演では、CLIL (Content and Language Integrated Learning: 内容言語統合型学習)の考え方を紹介しつつ、それがいかに日本の検定教科書を使った授業に生かしていけるのかを具体的な活動を通して紹介したい。CLIL とは、文法や語彙などの言語指導をそれらが伝える内容と遊離させて行うのではなく、内容学習と言語学習を融合させて指導していこうとする教え方である。その考え方は技能統合型の教育アプローチに立脚しており、言葉と内容を密接に関連させて教えることで双方の学びの相乗効果を狙う教え方である。その根本的理念は、「学びつつ使い、使いつつ学ぶ」(“Learn as you use, use as you learn”) という言葉に端的に表されている。

CLIL のアプローチは高校や大学などで特に英語能力が既に発達した上級学習者を対象に使われるものと思われがちだが、実際は小・中・高・大学のどのレベルでも応用可能であり、これら各種のレベルでこれまでも数々の成果をあげてきているアプローチである。また、CLIL は外国語としての英語 (English as a Foreign Language) 環境よりも第2言語としての英語 (English as a Second Language) 学習環境でより有効だといった勘違いもあるが、CLIL はこういった学習環境の違いを越えて有効となる教育アプローチである。CLIL がヨーロッパで多言語主義に基づき主に外国語教育の手段として発展してきたことを考えると、ESL というよりもより EFL に発想がより近い考え方とも言える。これからの日本の英語教育は ESL と EFL の二分対立的な考え方よりも EIL (English as an International Language) や ELF (English as a Lingua Franca) と幅広く実用的に捉えた方がより現状を反映しており、より有益な英語教育への応用可能性が広がってくると考えられる。

学校の教育現場で CLIL を試行していくためには、教科書に登場する言語項目とそこで扱われている話題をいかに融合させて活動を進めていくかが鍵となるだろう。そこで、本講演では特に中学校の活動を中心に話を進めていく中で、いかに CLIL の考え方が教室指導で役立ち得るかを具体例を提示しながら皆さんと一緒に考えていきたいと思う。

(講演は英語で行われます)

学習者の学びについて考える

パネリスト	八島 智子 (関西大学) Stephen Ryan (Waseda University)
指定討論者	吉田 達弘 (兵庫教育大学) 新多 了 (名古屋学院大学)

それぞれの学習者の視点にたった指導が唱えられるようになって久しい中、昨今では学習者や彼(女)らの「学び」の捉え方も立場の違いにより様々となっている。そこでそれぞれの立場の違いから、同じ学習者をどのように捉えているのか、それを通して我々はどうのような指導を実践していくことができるのか、などを考える機会としたい。

Willingness to Communicate (WTC) から見る学習者心理

八島 智子 (関西大学)

Willingness to Communicate (自発的にコミュニケーションを開始する傾向、WTC) は、「学習者にとって英語でコミュニケーションをするというのはいかに複雑な作業なのか」ということを教えてくれる概念である。WTC には、不安・内向性などの性格要因、状況・相手などの社会的要因、文化的規範など多様な要因が絡む。もともとアメリカのコミュニケーション学で発達したこの概念には、アメリカ文化の価値観が反映されている。この概念を日本のコンテクストに導入するにあたり、多く話すことが必ずしも評価されない日本の文化的価値観との適合度についてかなり悩んだ。しかし、滞米日本人留学生が、積極的な発言が評価される文化において、不自由な第二言語で自らの位置取りに奮闘しているのを見るなかで、L2 WTC の必要性を実感した。つまり、第二言語を習得するにはコミュニケーションの必要があるが、教室の外では、その機会は待っていてもやってこない。英語力を伸ばすために学習者が自ら使う機会を創出する必要があるところに、英語で WTC を育てる意義を見出したのである。

L2 WTC は、L2 習熟度や自信、学習動機なども加わり L1 の場合より一層複雑化する。WTC 研究の初期には、このような変数間の関係を探り、学習者の全体傾向を捉える数量的な研究が主流であった。最近では、応用言語学における社会的転回(social turn)の影響を受けて、教室で、教師の問いかけや他者との関係性のなかで刻々と変化する“dynamic”で“situated”な WTC に注目した質的研究も増えている。本発表後半では、そういった研究の一例として、英語の授業においていわゆる I-R-F (Initiation-Response-Feedback) パターンをなくし学習者に議論させるという介入型実践を紹介する。このなかで、クラス全体はどのように反応するのか、学習者の発話回数の差はどのように生まれるのか、またよく発話する学生と全く発話しなかった学生が、それぞれどのように感じ、何を考えていたのか、その心理を探っていく。

数量的な WTC 研究は、教育実践の効果をコミュニケーションへの積極性や自信の獲得という観点から全体的に評価するために役立つ。一方質的な研究は、学習者個人個人の置かれた場所から教室での実践を見る視座を与えてくれる。

Motivation: What's the point?

Stephen Ryan (Waseda University)

In recent years, there have been great changes in how we think about the motivation to learn a foreign language and these changes have been accompanied by a huge surge in research in the field. In one sense it is highly encouraging that Japan-based studies have been so prominent in this development (Dörnyei & Ryan, 2015), but in another sense, it is somewhat discouraging to discover that much of the research conducted in Japanese educational settings, particularly in connection to the learning of English, paints a broadly negative picture based around issues of demotivated learners, uninspiring lessons and unsatisfactory learning outcomes. In this talk, I intend to challenge that negative consensus. In the first part of the talk, I will present an overview of some of the key ideas emerging from the new wave of motivation research, looking at key concepts, such as the L2 Motivational Self System and narrative identity, and consider how they connect to actual classrooms. In the second part of the talk, I will introduce and explore concepts drawn from positive psychology, in particular ideas such as positive communication and passion. By tying these concepts to the established L2 motivation literature, I hope to reframe language learning motivation in Japanese classrooms in a more optimistic, educationally friendly light.

Dörnyei, Z & Ryan, S. (2015) *The psychology of the language learner revisited*. New York: Routledge.

社会文化的理論からみた学習者の学び： 学びの種はインタラクションの中にあるのか？

吉田 達弘（兵庫教育大学）

第2言語習得研究では、言語学習や習得を個人の情報処理プロセスとみる認知主義的アプローチが、今なお主流であるが、近年、言語使用者間のインタラクションそのものを分析単位とし、そこで発生する発達や学びのプロセスを詳細に分析する実証研究が提唱されている。Atkinson (2011) は、そういった研究を、“Alternative approaches”と概括しているが、社会文化的理論 (Sociocultural Theory, 以下, SCT) も、そのような研究の一つである。SCT では、学習者同士あるいは学習者と教師のインタラクションに発達の種があると考え、学習者がインタラクションを内化するプロセスを探究する (Lantolf, 2000; Lantolf & Thorne, 2006)。しかし、これまでの第2言語習得研究でも、例えば「相互作用仮説」のように、インタラクションに一定の役割が与えられており、SCT の見方が、これまでの研究とどのように異なるのかわかりにくいという声もある。

そこで、本発表では、van Compernelle (2015) が示す「弱いインタラクション」と「強いインタラクション」という見方から、認知主義的アプローチと SCT の違いを整理し、その上で、英語授業で観察されたインタラクションを、SCT の枠組みから分析する。分析を通して、学習者や教師が、協同的な学びの場を作りだし、やりとりの中で学ぶプロセスをお示ししたい。具体的には、(1) 教師の段階的支援 (gradual mediation) と集団的支援 (collective scaffolding)、(2) 模倣 (imitation) および役割逆転模倣 (role reverse imitation) の活動、などの事例を取り上げる。

最後に、会話分析を用いた詳細なインタラクションの分析が、授業者の実践感覚に寄り添い、豊かな授業の見方を生み出すことに貢献しているかどうかについても検討してみたい。

- Atkinson, D. (2011). *Alternative approaches to second language acquisition*. New York, NY: Routledge.
- Lantolf, J. P. (2000). *Sociocultural theory and second language learning*. New York, NY: Oxford University Press.
- Lantolf, J. P., & Thorne, S. L. (2006). *Sociocultural theory and the genesis of second language development*. New York: Oxford University Press.
- van Compernelle, R. A. (2015). *Interaction and second language development: A Vygotskian perspective*. Amsterdam, The Netherlands: John Benjamins.

電子書籍を「聞く」 - スマートフォンの Text-to-Speech の活用 -

E-book "Listening" using Text-to-Speech on Smartphones

清原 文代(大阪府立大学)

キーワード： 電子書籍, EPUB, Text-to-Speech

学習者に朗読や暗誦させたい文章を電子書籍（EPUB）に加工し、スマートフォンが内蔵する Text-to-Speech を使って読み上げる方法を紹介する。TTS は読み間違いが皆無ではないとはいえ、任意の箇所を任意の速度で繰り返し聞くことができる。また、スマートフォンの音声入力を使って電子書籍アプリのメモに当該文章を入力することにより、聞く→発音するというサイクルで練習することも可能である。

Quiz Grading and Analysis: Two Minutes and One Cellphone

クイズの採点・分析：2分と携帯1台

Myles, Grogan (Kansai University)

キーワード： mobile, assessment, testing

Although teachers may have some ideas about their testing practice, very few have access to item-by-item data. Recent technology allows scanning of quizzes completed on a bubble sheet using only a cellphone camera and a simple mobile app. This presentation introduces the benefits of cellphone applications for scoring paper-based tests, and classroom practices with such applications. The presentation introduces some practical ways of using the software for collaborative activities and weekly quizzes. It concludes with a discussion of when this system is a bonus (think end of term quizzes!) and when to use something different.

学習経験と学習に対する価値づけが振り返りに与える影響：

e-Learning 語彙教材使用者を対象にして

Effects of learning experience and task values for English language learning on reflection:
Focusing on users of English vocabulary e-Learning system

松岡 真由子(京都大学 大学院生)

キーワード： 課題価値, 語彙学習方略, 自己調整学習, 振り返り

1. はじめに

自己調整学習の循環モデルには自己内省が組み込まれている (Zimmerman & Schunk, 2001)。英語教師が授業内で学習者に振り返りを行わせる光景はよくみられるが、単なるリアクションペーパーにすぎないのではないかという批判も見受けられる。そこで本研究では、自己調整学習につながる効果的な振り返りの方法を探るため、学習経験年数と課題価値が学習の振り返りに与える影響について検証した。

2. 調査対象者と手順

調査対象者は、e-Learning 語彙教材を使用している京都府の中学生、高校生 220 名であった。課題価値についての質問紙調査を行い、語彙学習の振り返りについては普段使用している方略について詳細に記述させる形でデータを収集し、総文字数をカウントして分析に使用した。

表 1. 一要因分散分析の結果 (学習経験)

Source	SS	df	MS	F	p	η_G^2
年数	13527.882	2	6763.941	14.116	.000	.134
誤差	101106.1155	211	479.176			
全体	114634.037	213				

表 2. 一要因分散分析の結果 (課題価値)

Source	SS	df	MS	F	p	η_G^2
課題価値	3325.204	2	1662.602	3.152	.045	.029
誤差	111308.834	211	527.530			
全体	114634.037	213				

3. 結果

分析の結果、学習経験 (年数) は有意でかつ効果量が大きく、課題価値については有意であったが効果量が小さいことが分かった。Tukey を用いて多重比較を行ったところ、学習年数短群と中群、課題価値低群と中群、中群と高群の間には有意さは認められなかった。

参考文献

Zimmerman, B. J., & Schunk, D. H. (2001). *Self-regulated learning and academic achievement: Theoretical perspectives* (2nd ed.). NY: Routledge.

初級学習者のための英語ディベート：

「シンプル・ディベート」の試み

English Debating for Elementary-Level Learners: An Attempt of “Simple Debating”

橋尾 晋平(同志社大学 大学院生)

キーワード：英語教育，ディベート，初級学習者，シンプル・ディベート

1. 英語ディベートの学習効果とは

英語ディベートに参加する学習者は、第三者にスピーチを行い、その第三者のフィードバックを受けることで、英語運用能力の向上が期待できる。また、そのスピーチに基づいて、ディベートの試合の勝敗が決するというゲーム性が、スピーチの質向上につながるモチベーションを支える。拙稿(2016a, 2016b)は、英語ディベートがライティング能力の向上に効果的であると主張した。ディベート経験者は、ライティングなどの文産出において、多様な定型化された表現を身につけており、各節の主題の展開パターンを工夫できるようになる。これらの研究は、中級レベル以上の学習者の大学のサークル活動を想定したものであったが、本発表では、ディベートを初級学習者の授業に導入できるかの提案を行う。

2. 初級学習者のクラスへの実践に向けた課題

従来のディベート活動は、特定のテーマについて自分の考えを英語で表現するものであるため、初級学習者にとって、内容が思いつかない、また、思いついた内容を英語で表現できないなどの課題が指摘される。しかし、本発表では、サークル活動と同じ形式ではなくとも、それを簡略化した類似の形式を採れば、初級学習者の授業でも導入可能であると主張する。ここでは、来年度に設置されるA大学の新学部にて開講予定の「シンプル・ディベート」の授業の指導案とこの指導案を部分的に導入したB短期大学の「Business English」の授業の例を基にする。

3. 「シンプル・ディベート」の指導案とその実践

「シンプル・ディベート」では、特定のテーマに対して、賛成・反対に分かれ、立論・反駁のスピーチを1回ずつ行う。スピーチ作成に際し、賛成・反対の根拠にあたる部分について、ブレイン・ストーミングとなる授業を実施し、それを踏まえ、スピーチを作成させる。1~2分間のスピーチの語数は、従来200~300wordsとされ、初級学習者にとって非常に多いので、拙稿(2016a, 2016b)の指摘を踏まえ、定型化された表現を提示し、文章をどのような構成にするのかを指導する。B短期大学の「Business English」では、定型表現の提示と文章の構成についての明示的な指導を行い、5名の学生に好きなテーマで50words程度のライティングに取り組ませた。参加した5名の学生からは、書くことへの心的負荷が軽減され、書くことの楽しさを感じることができたというフィードバックが得られた。全体の語数や段落中の文数が増えた場合の対応についての課題は残るが、「シンプル・ディベート」でも、先述の指導方法を軸にした授業を実施できれば、初級学習者も英語ディベートを行うことができると主張する。

参考文献

- 橋尾晋平(2016a)．アカデミック・ディベート経験者のライティングにおける語彙の実態に関する一考察 『比較文化研究』121, 125-136.
- 橋尾晋平(2016b)．アカデミック・ディベートを通して向上する語彙力に関する一考察. 日本比較文化学会第38回国際学術大会発表資料.

リーディングラブ Ver. 2 の開発

Development of the ReadingLab Ver. 2

平尾 日出夫(追手門学院大学)

キーワード： e-ラーニング，グループワーク，グローバル人材育成

1. はじめに

グローバル人材育成への社会的要請が高まっている。今日英語教育者に課せられ、これまであまり焦点が当たることのなかった課題が、いかに効率的に英語上級学習者を自律的に英語を利用して専門内容を学習することのできる独立した学習者(Independent learner)に橋渡し(Scaffolding)するかということである。このような観点から、対象となる学生に対して、短期間での実務的な英文読解能力の養成を目指したリーディングラブを2015年度に開発した(平尾(2016 予定)参照)。2016年度は、この初期バージョンの試験運用の際に見いだされた、本コースウェアの正課利用で問題となった点について修正を行った。

2. リーディングラブ初期バージョン

実務的英文読解養成を目指したリーディングラブは、コンピュータネットワークを利用し、高い学習効果が期待できるグループワークを基本に、問題解決型(Problem Based Learning: PBL)のコースウェアである。すべての単元は5つのパラグラフからなる文章を素材としており、15単元で構成される。単元は難易度順に配置される。それぞれの単元は、前半と後半の問題演習に分かれる。前半では、5つのパラグラフがランダムに表示され、文章の中から選定された難易度の高い語句の意味を問う10問の問題が提示される。学生は、提示された文章から正しい文章の順番と語句の意味を類推し答える。

後半の問題では、正しい文章が提示され、それぞれのパラグラフに関する内容理解の問題と最後にこの文章に対する最適な題名を答えることが求められる。学生の答は、サーバーに記録されるが、その場でA4用紙1枚に印刷することもできる。

3. バージョンアップ

初期バージョンの試験運用の際に判明した大学の正課授業での利用に対する問題点は、大学では授業開始後に学生がバラバラと授業参加することであった。初期バージョンでは、問題開始前にグループ名とメンバーを入力するが、問題演習に入ってしまうと受講者の追加はできなかった。このため、サーバーに記録の残らない学生が出ることとなった。

4. 結果と展望

バージョンアップは完了し、供用できる状態となっている。今後は協力していただける先生方を募り、このコースウェアの効果の検証を行いたい。まずは、教員5人、学生数100人から150人程度での検証の実施を考えている。参加を希望される先生やご関心のおありの先生方は、平尾日出夫(h-hirao@otemon.ac.jp)までご連絡いただければ幸いである。

参考文献

平尾日出夫(2016 予定)．リーディングラブの開発 『追手門学院大学教育開発奨励制度助成金教育開発プログラム成果報告書：2015年度』．

Text-to-Speech を使った音読練習によるプロソディ向上の効果

Effects on Improving Prosody Using Text-to-Speech

笠巻 知子(立命館大学)

キーワード：Text-to-Speech, 音読, プロソディ

1. はじめに

音読がプロソディの向上において効果があることは、すでに立証されている (Mori, 2011)。また音読指導においては音読のモデルをたくさん聞かせ、模倣をさせる必要があるとされている (川崎, 2012; 飯村・高波, 2016)。しかし、教室外において学習者が自律的に音読練習を行う場合のさまざまな題材や方法について、その有用性はまだ十分に検証がおこなわれていない。そこで本研究では、学習者が自ら作成した発表原稿を、音声読み上げソフトである Ivona あるいは Natural Reader を利用して音読練習をした場合、プロソディが向上するかどうかを調べた。

2. 参加者

参加者は、筆者担当の大学1年生4クラスの61名であった(分析対象は48名)。参加者は、自分の興味・関心のあることに基づいてリサーチをした成果を英語で一人8分間のプレゼンテーションを行った。

3. 実験方法

4クラスのうち2クラスに対しては、発表前の授業において、積極的に音読の指導を行った。各学生の発表原稿を上記のソフトに読み上げさせ、各自授業内で発表原稿を音読練習させ、処置群とした。もう2クラスにおいては、音声読み上げソフトを使用した音読練習の方法を説明し、自主的に練習するよう促すにとどめ、対照群とした。そして、音読テストとして、筆者が作成した「喜び」、「落胆」、「悲しみ」、「嬉しさ」、「怒り」の5つの感情表現を盛り入れた原稿を、事前テストと事後テストの2回読み上げさせ、それぞれ録音したものを分析し、プロソディが向上するかどうかを調べた。評価は、感情が込められているか、イントネーションが平板になっていないか、ストレスの位置は正しいか、発音が間違っていないかの4つの観点から10段階評価で行った。

4. 結果と考察

分析の結果、処置群、対照群ともに、事前テストから事後テストにかけて、効果量大(処置群: $p=.000$, $r=.81$, 対照群: $p=.001$, $r=.74$)で、有意な向上が見られた。また、事後テストにおいては、処置群と対照群の間に有意差はなかったが、効果量は小($r=.22$)であった。これにより、授業内で積極的に音読指導および練習をしたクラスと、自主的に音読練習をしたクラスともに、音声読み上げソフトを使用した音読練習によるプロソディの向上の効果が実証された。

参考文献

- Mori, Y. (2011). Shadowing with Oral Reading: Effects of Combined Training on the Improvement of Japanese EFL Learners' Prosody. *Language Education & Technology*, 48, 1-22. 外国語教育メディア学会
- 飯村英樹・高波幸代 (2016). 「模倣音読」活動が音読技能およびスピーキング力に与える影響」*Annual Review of English Language Education* 27, 293-308. 全国英語教育学会
- 川崎真理子 (2012). 「音読指導 Q&A: 2.9 英文をモデルなしで読めるようにするには?」鈴木寿一・門田修平 (編) 『フォニックスからシャドーイングまで 英語音読指導ハンドブック』24-25, 東京: 大修館書店

日本人学習者の英語イントネーション再考

English Intonation of Japanese EFL Learners Reconsidered

東 淳一(神戸学院大学)

キーワード： 英語，イントネーション，日本人学習者，音声分析

1. はじめに

英語と日本語のイントネーションについて、実験音韻論の立場から案外共通点が多いという指摘があるものの (Beckman & Pierrehumbert, p.305)、藤崎・須藤モデルのようなイントネーション生成の数理モデルは日本語以外の言語には適用困難であるという Ladd (2008, p.28) の指摘もある。また、外国語教育の立場では母語の韻律的特徴がいかに関目標言語発話の韻律に影響を与えるかという問題は古くて新しいテーマである。本研究では日本人学習者の英語イントネーションについて、基本周波数 (F0) に基づいた特殊な定量分析を行い、日本人学習者が発話する英語のイントネーションの特徴を考察した。

2. 手順

母語としてのイントネーションの特徴を考察するため、RP の英語、ロンドン南東部在住者の英語、ニューヨーク在住者の英語について、イソップ童話の「北風と太陽」(The North Wind and the Sun) の朗読の F0 を抽出し分析した。同時に関東方言および関西方言の日本人による日本語での「北風と太陽」の発話についても F0 を分析した。さらに日本人大学生 (2名) により発話された英語の「北風と太陽」の発話についても F0 分析を行った。分析では WaveSurfer を利用し、無音区間等 F0 が抽出されない区間は削除し、1 発話について完全に連続した F0 データを分析素材とした。F0 値は 10ms ごとに抽出されるが、100 個の区間 (つまり 1 秒) ごとに移動平均を計算し、同時にいわゆるボリンジャーバンドを $\pm 2\sigma$ で描画できるように計算した。ボリンジャーバンドとは、移動平均値に同じ区間の素データの標準偏差の 2 倍の値を足した値および引いた値であり、移動平均と同時に $+2\sigma$ と -2σ の値がプロットされる。各発話について F0 が移動平均線を横切った回数、ボリンジャーバンドの 2σ と -2σ との差の値 (つまり 4σ の値) の分布状況等も調査した。

3. F0 分析の結果および考察と結論

英語話者、日本語話者ともに、母語を朗読した場合 F0 値の分布に大きな数量的差異は観察されなかった。唯一目立ったのは F0 が移動平均線を横切った回数で、日本語話者による日本語読みの方が圧倒的に英語の場合よりも多かった (約 2 倍)。これは、日本語の語彙アクセントの影響であろうと推察される。

問題は日本語話者による英語の朗読で、いずれもボリンジャーバンドの 2σ と -2σ との差がかなり小さかった。また、英語話者と同一のテキストを発話しているにもかかわらず、F0 が移動平均線を横切った回数が顕著に多かった (約 2 倍)。これは、日本人学習者による英語発話において、イントネーションが母語である日本語の影響を受けていると同時に、F0 の変動幅が小さいということを示す。分析結果は、日本人学習者の英語発話においてピッチの上下が顕著であるように聞こえるという聴覚印象と合致するが、その場合のピッチの上下幅は予想に反して案外小さいことが今回の研究からわかった。

参考文献

- Beckman, M, & Pierrehumbert, J. (1986). Intonational structure in Japanese and English. *Phonology Yearbook*, 3, 255-309.
- Ladd, R. (2008). *Intonational Phonology*, Cambridge: Cambridge University Press.

TOEIC リスニング授業におけるパワーポイントを用いた 音読トレーニング

Introduction of Reading Aloud Practice Using Power Point in TOEIC Listening Classes

大橋 香苗 (京都産業大学)

西浦 ミナ子 (京都産業大学)

キーワード：音読トレーニング、パワーポイント、Audacity

1. はじめに

英語指導において音読がリスニング力やリーディング力向上に効果を持つことは複数の先行研究において報告されている (Hamada 2014; 鈴木 1998)。したがってリスニングの授業においては出来る限り効率のよい音読方法が求められる。その一つの実践例として、本報告では京都の私立4年制大学のTOEICリスニングクラス(必修)における「パワーポイントを用いた音読トレーニング」について報告する。

2. 音読トレーニングの方法

トレーニングは、初級、中級クラスを履修する2年生を対象に2014～2015年の秋学期に行った(表1)。

表1. 音読トレーニング参加者の内訳

	2014年秋学期	2015年秋学期	計
初級	182	111	293
中級	84	76	160

各授業ではTOEICリスニング形式の問題演習、答え合わせ、スクリプトによる音声内容確認作業に続き、音読トレーニングに入る。音読トレーニング用のパワーポイントには、音声、スクリプト、画像などが組み込まれている。音声編集ソフトのAudacityを用いて低速や高速の音声を作成し、様々なスピードの音声を織り交ぜながら次のような一連のトレーニングが可能となる。1. スライドに映しチャックに分けながらリピート、2. 全文をリピート、3. Read & Look up、4. 同時読み、5. シャドーイング

3. 結果と考察

パワーポイントを使った音読トレーニングの利点としては以下の点が挙げられる。

1. スクリプトを映すことで学生が前を向いて音読するため、集中力の向上が期待できる。
2. 様々なスピードの音声とスライドの一体化によりスムーズなリスニング授業運営が可能となる。
3. 会話やアナウンスも内容に合った絵や写真をスライドに映すことで内容の理解が促進される。

実際、学期末のアンケートでは受講学生から「効果的である」との声が聞かれ、又、本音読トレーニングを実践することで、授業運営面でも大幅な効率化が図れた。しかし、その効果を検証するには今後より多くのデータを収集し、分析する必要がある。手法の改良も模索しつつ、実践を継続していきたい。

参考文献

Hamada, Y. (2014). The effectiveness of pre-and post-shadowing in improving listening comprehension skills.

The Language Teacher, 38(1), 3-10.

鈴木寿一 (1998). 「音速指導再評価 - 音読指導の効果に関する実証的研究 - 」『外国語教育メディア 関西支部研究収録』, 7,13-28.



ATR CALL BRIX

ATR Computer Assisted Language Learning System

目的に合わせて、効果的な学習ができる！ 英語学習 eラーニングシステム

内田洋行 教育ICT・環境ソリューション事業部

環境マネジメントシステム規格 品質マネジメントシステム規格
内田洋行は ISO14001・ISO9001 認証取得企業です。
●東京地区オフィス(新川オフィス・清瀬オフィス・東横町オフィス)
 ●マーケティング本部 ●大阪支店 ●北海道支店 ●九州支店



ウチダホームページアドレス ▶ <http://school.uchida.co.jp/>

- | | |
|--|--|
| 東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25
東日本大学営業部 ☎ 03(5634)6441
ICT東日本営業部 ☎ 03(5634)6402 | 大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2
西日本大学営業部 ☎ 06(6920)2632
ICT西日本営業部 ☎ 06(6920)2641 |
| 仙台 〒983-0852 仙台市宮城野区福岡2-4-22
仙台東口ビル6階
ICT東日本営業部 ☎ 022(292)2783 | 名古屋 〒460-0003 名古屋市中区錦2-2-2
名古屋丸紅ビル13階
中部営業部 ☎ 052(222)7234 |
| 札幌 〒060-0041 札幌市中央区大通東3-1
北海道営業部 ☎ 011(214)8630 | 福岡 〒810-0041 福岡市中央区大名2-9-27
九州営業部 ☎ 092(735)6240 |